

論 試 論 私

天然繊維

今年の毎日ファッション大賞を受賞した大正紡績は、先駆者としてオーガニックコットンを広げてきた。来年は天然繊維の国際年。地球環境保全、トレーサビリティ（生産履歴追跡）、サステナビリティ（持続可能性）が時代のキーワードになり、フェアトレード含め社会貢献をしない企業は生き残れなくなってきた。繊維では「オーガニック」がその一翼を担うとしてクローズアップされる。オーガニックを軸に企業の生き残りのために天然繊維の可能性について、近藤健一取締役営業部長に話を聞いた。

（構成・堅田真弘）

わたしは綿花栽培で農薬をまったく使用しない有機栽培を提唱したサリー・フォックス女士に出会って以来、20年間オーガニックコットンを広めてきた。地球環境への関心がこれまで以上に高まるにつれ、オーガニックコットンへの需要が拡大し、年間生産高も10万トンを超えるまでに増えている。

安心安全が叫ばれ製品まで、それを届けるには何が一番いいのか。そのためにトレーサビリティが必要になってくる。通



大正紡績 取締役営業部長
近藤 健一さん

常の綿花栽培は収穫の際に枯葉剤を利用する。10000円のコットンTシャツを、枯葉剤を使い収穫した綿花を使っているかどうか調べるのに、およそ20万円必要になる。そんなお金をかける人はいない。オーガニック

コットンは第3者機関が認証を行うため信用できる。わたし自身は現地主義で綿作農家の顔を見ていないものは使わない。買付けも収穫の前年。そうすればお互い信頼関係も生まれる。今年、馬淵繊維（香川県高松

市）が自社の農園で育てた有機栽培綿を収穫した。これこそはっきりとしたトレーサビリティが明示できるものだ。「自分で摘みました」とはっきり言えるから強い。他社では言い切れない。同社のブランド「アイランドテック」は、世界に進出できるブランドになるだろう。人

と世界でつくればいい。綿花は北緯。45の中国・新疆ウイグル自治区ウルムチから南緯。35の豪州ナモイまでで栽培され、綿作国は86カ国。しかし、栽培が可能な北緯。45―南緯。35にはおよそ170カ国がある。残りの国々も栽培を行えば、オーガニックコットンは現在の10―20倍生産できると思われる。ものづくりも素材の良さにこだわり、人が幸せを感じる「愛情設計」が大切。ストーリーのあるものづくりをする企業は生き残れる。

天然繊維に回帰せよ

解説・主張